

本田和子（著）

『ところで軍国少女はどこへ行った』

2019年 ななみ書房 A5判 183頁 定価（本体1,200円＋税）

小坂田 摩由*

本著は元お茶の水女子大学初代女性学長として知られ、現在同大学名誉教授でもある本田和子氏が、第二次世界大戦下での小学校・国民学校時代を中心に回顧した自叙伝的著作である。児童学・児童文化論・児童社会史などを専門とする本田氏は『異文化としての子ども』『それでも子どもは減っていく』などの著作を通じて、長年の間鋭い視点で子どもという存在の本質を捉えてきた。その研究が世に知られてゆく過程では、おそらく多くの人々が本田氏自身の少女時代にも興味をそそられてきたことであろう。

後に太平洋戦争の発火点として位置づけられることとなる満州事変の年・昭和6（1931）年に生を受けた著者は、単なる一人の子どもではなく「少国民」と呼ばれて育ち、やがて「軍国少女」として成長していった。しかし当然のことながら、幼い子どもたちに戦争の何たるかが常に正面から説かれたわけではない。むしろそういった機会のごく限られていたにもかかわらず、当時の女の子たちは自然に「軍国少女」となっていった。一人の少女はいかにして「少国民」から「軍国少女」として形作られていったのか、そして戦後「軍国少女」はどこへ消えたのか。著者は並外れた記憶力と洞察力で自身の過去を回顧し、そこに「日本国史」と「戦時歌謡」というふたつのキーワードを見出すことで、「軍国少女」形成と風化の過程の考察を試みている。

まず第一部「戦時下の学校教育」では、著者が実際に国民学校で学んだ天皇を中心とした「日本国史」について語られる。縄文も弥生もなく、大日本帝国の始まりを高天原とする「日本国史」を著者はいびつな教育と評するが、当時の子どもたちはその物語に納得していた。こうした天皇の歴史を軸に進む歴史を素直に学ぶに従って、著者の中には天皇及びその存在を敬い、従う人＝「いい人」「大忠臣」、天皇や朝廷に逆らう者＝「不忠の民」「大悪臣」、という図式が出来上がっていったという。さらにはより悲劇的な物語を持つ天皇（後醍醐天皇など）や命を懸けて天皇をお守りしたとされる人物（楠木正成など）は特に「いい人」として、著者の中で高く評価されていった。しかしそれは筆者の中に、第二次世界大戦末期に辞世を残して命を散らす若者たちに心を震わせ、相次いだ「玉砕」を美しいとし、それゆえに正義は日本にこそあると判断する価値観を作り出した。教師に従って素直に学び、教えられたことをまっすぐに信じた優等生の著者は、だからこそ神の国である日本の勝利を疑わない「軍国少女」となったと言える。

加えて、神武天皇より始まって昭和天皇に至る「日本国史」は、決してその授業中だけに教えられるものだったわけではない。「国語」「修身」など他の授業でも取り上げられ、また常に物語は子どもの目を引く絵を掲げた状態で叩き込まれていった。さらには著者の記憶を元に記された数多くの小学唱歌や鞠つき歌も、そういった物語を子どもたちの世界に浸透させる大きな役割を担っていたと言える。当時の唱歌コンクールなどでも、悲運の天皇を慰めた忠臣の功績を歌う曲が課題曲となっていたという。本当のことと信じる・信じないはさておき、物語として子どもの心に響くことを重視していたと著者は追想している。

第二部「戦時歌謡と子ども」では、第一部でも多く取り上げられた戦時中の歌が、いかに子どもの間に浸透していたかが綴られる。当然ながら、著者の幼年期の生活にあふれていた歌の全てが戦時歌謡であったとは言えない。現在でも文部省唱歌として残る「冬景色」や「朧月夜」も、当時から歌われていたという。しかし基本的に、子どもたちは歌の意味など考えもせず覚えて歌うものである。そうなると、子どもの実体験に必ずしもそぐわない自然や風景を優雅に歌う文部省唱歌より、勇ましく勢いの良い「戦時歌謡」

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

の方が子どもたちには好まれた。そして「音楽を動員せよ」という使命の下に生み出された数々の「戦時歌謡」は、鞠つき歌や縄跳び、あるいは「戦争ごっこ」中に口ずさまれる歌の姿で、時に奇天烈で滑稽な替え歌へとすり替わりながらも、子どもたちの生活へと巧みに入り込んでその目的を果たしたのである。

著者は戦意高揚のための映画鑑賞も国民学校での日々として回想しているが、実際に覚えているのは映画の内容より主題歌であったと述べている。また唱歌コンクールにおいても、皇国史観に基づく「日本国史」や「修身」を補強する歌は多かった。著者を受け持った音楽教師は独自の考えを持っていたらしく北原白秋の歌を選んだとあるが、その白秋も戦時下では戦意高揚のためプロパガンダに利用された詩人であったことを考えると皮肉である。なお、著者は白秋の童謡の歌詞については記憶が曖昧であり、「戦時歌謡」の方が歌いたかったと思っていたという。やはり「戦時歌謡」は当時の子どもたちにとって、それまでの童謡よりもずっと慣れ親しんでいる存在だったようだ。こうして「戦時歌謡」は子どもの生活、特に遊びに入り込む。子どもたちは自責の念もなく面白さに駆られて遊ぶことで「子ども遊び」を拡散してゆく存在だが、その遊びに「戦時歌謡」はよりフィットするというのを、著者は驚きと共に記している。

またこうして数多くの「戦時歌謡」を記憶していることについても、著者は自身が少女であったことと関連していると述べる。戦地に赴くことのない子どもであり女性である著者にとって、戦争とはまさしく歌のことであった。子どもたちが皆でこうした歌を「遊び歌」として声を揃えて歌うことは、子どもなりに戦争に参加し、愛国心を示すことにもつながる。歌こそが子どもたちを呪縛し、この戦争は神の国日本がアジアを欧米列強から救う聖戦であるという信念を植え付けていったのである。

最後の第三部「軍国少女はどこへ行ったか」では、著者の戦後体験が語られる。教師の言うことを聞き、真面目なよい子であった著者は立派な「軍国少女」であったが、やがて「普通の女性」へと戻っていったのだ。いつ、どうやって戻ったかは不明だが、戦争や平和についてなど考える暇もなく混乱期を乗り越えてゆくうちに時代が変わっていったというのが、著者の「戦後体験」であると述べられている。忙しさ、特に大学受験とその後の大学生活のためにがむしゃらに学んだことが、「軍国少女」を「普通の女性」へと変えていったのだろうか。著者はその過程をやや曖昧に記しているが、学びこそが「軍国少女」を解放する希望のひとつであったとも考えられるだろう。

国民学校教育を通じて徹底的に植え付けられた「軍国少女」という生き方は、著者からは案外にあっさり消え去った。しかし、その全てがなかったことになったわけではない。万世一系の天皇が治める神の国と同じように古くから続くということをやしとする価値観、そしてそれを美とする価値観が、著者の中に居座った。大人の言うことをよく聞く優等生であったがゆえに、その価値観は一度も疑われることなく著者の精神に深く根を張ったのである。

著者は「むすびのことば」にて、「子どもは教育を通じて一定方向に形作られ易い」と主張する。多様性が叫ばれながらも大人、特に教師を絶対と仰ぐ教育が廃れてきたとは言い難い昨今においても、子どもたちの教育を担う大人の責任は変わらず重いものであろう。著者は本著を通じて同様の主張を繰り返しており、真面目で先生の言うことをよく聞く子どもほど「軍国少女」化してゆくと説いている。それは少々疑問に思うことがあっても口を閉ざし、そのようなものなのだろうと納得して信じ、やがて「軍国少女」となっていった著者自身の少女時代に対する一縷の悔恨を含むものなのかもしれない。

ところで2022年3月現在、ウクライナ・ロシア間での戦争が世界を揺るがせて続けている。子どもたちを含む多くの命が失われる中、先日ニュースではロシア軍の犠牲者数がロシア当局による発表とNATOの発表では大きく異なる旨が報じられていた。本著の中で著者が大戦末期、B29が空を飛び交い、街が黒焦げになる中でラジオから聞いたという「わが方の損害軽微なり」の一言に似た白々しさを感じる筆者は、その言葉を疑いもせず敗戦当日まで信じ続けた「軍国少年・少女」たちのこと、そして彼ら・彼女らから奪われた子ども時代をも思わずにはいられない。一刻も早くこの戦争が終結し、世界の秩序が保たれ、防空壕の中で著者から「この子たちは、何のためにこんな時代に生まれてきたのだろう」と哀れまれた弟妹たちのような子どもたちのいない平和が訪れることを祈る。